

令和 3 年 6 月 27 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02703

研究課題名（和文）ナラティブ・アプローチによるコンピテンシー・ベースの小中一貫カリキュラム開発研究

研究課題名（英文）A study on the construction of a consistent curriculum for elementary and junior high schools based on the development of competencies through the method of Narrative-Approach

研究代表者

吉川 幸男（YOSHIKAWA, Yukio）

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：40220610

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教員養成学部の教員とその附属学校の教員とが、持続的、継続的な語り合いを通して、小中学校の各段階において獲得するコンピテンシーを明らかにし、それらを系統的に育成するための視点と方法を打ち出すことによって、今日地域的に関心を集めている小中一貫カリキュラムの構築に寄与しようとしたものである。あらかじめ大きな理論仮説を立てず、授業実践の実際から帰納的に語り合う方法を通して、通教科的な汎用的コンピテンシーと、教科固有の視点や概念が関係付けられ、カリキュラム構想の発展し得ることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義は次の2点である。第一に、附属学校の教育実践研究が地域に大きく貢献できる内容になった点が挙げられる。この点は2019年度、附属光小中学校研究大会に参加した現職教員への6ヵ月後のフォローアップ調査における高評価からもうかがえる。第二に、附属学校を活用して学部教員が科研の研究を相互の協議で行うことにより、学部教員は学校の実態に即した研究が可能になり、附属教員は自校のみで展開する理論仮説に振り回されず、より広い視野から自校の教育実践研究を位置付けることができた点である。これは今日求められている教員養成学部と附属学校との望ましい関係といえる。

研究成果の概要（英文）：This study is a perspective for systematically nurturing the competencies that acquire at each stage of elementary and junior high school through continuous and continual talking between teachers of the Faculty of Education and teachers of their affiliated schools. By setting out the method, we tried to contribute to the construction of a consistent curriculum for elementary and junior high schools that is attracting regional interest today. It is clear that the curriculum concept can be developed by associating the general competencies of many subjects with the viewpoints or concepts peculiar to one subject through the method of continuous talking about the actual lesson practice inductively, without making a grand theoretical hypothesis in advance.

研究分野：教科教育学（社会科教育）

キーワード：小中一貫カリキュラム 資質能力 授業研究 ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

本研究には二つの背景がある。

第一は、2017年の改訂学習指導要領の方向性を見据え、今日、内容ベース(何を教えるか)からコンピテンシー・ベース(何ができるようになるか)のカリキュラムへ、学校教育カリキュラムが見直されようとしている今日状況である。このような動きに対しては現代社会の動向(グローバル化、情報化、知識基盤社会)に応じたものとされる一方で、教科の内容が語られなくなることによる教科学習の空洞化の懸念も指摘されている。¹⁾

こうした状況を受けて、今日、コンピテンシー・ベースのカリキュラムは、教科を超えた汎用的スキルや態度形成の目標が先行するのではなく、教科内容の学びの質との関わりの中で構築されてゆく必要がある。すなわちコンピテンシー・ベースにおいては、学校カリキュラムは一般的なカリキュラム論・授業論からではなく、徹底して教科の学びの事実からの帰納を方法とし、そこから複数教科にまたがる学びや知の総合化を見通すことによって漸進的に構築されてくるという発想に立つべきであろう。

第二は、小中一貫教育の動向である。今日、行政的な後ろ盾もあって全国的に小中一貫教育が推進されようとしている。その形態は多様であり、主に生徒指導的な脈絡から小中間の連絡を密にするものや、小中の滑らかな接続をはかるため小学校高学年に中学校の内容を取り入れたり中学校教員が小学校で指導するなど、教員の乗り入れや内容配列に関する試みが、現状多くを占めている。²⁾

しかしながら思考力・判断力や資質能力という形成的な面から9年間を見通し、系統的な一貫指導を試みている例は、現状では蓄積が非常に薄く、まだ一定の動向を形成する段階にはない。

以上二つの背景から、本研究ではコンピテンシー・ベースの小中一貫カリキュラムの開発を、各教科の学びからの帰納を基に試みるものである。

2. 研究の目的

本研究は、次の三点を明らかにすることを試みた。

1) 小中義務教育機関9年間における初期・中期・後期において、各教科においてはそれぞれどのような資質能力形成の要素やモメントを内包しているのか。この点を、具体的な授業研究をもとに、授業者とわれわれ研究者集団との意見交換を通して明らかにする。

2) 各教科間の関連をはかることによって、複数教科にまたがる資質能力や多くの教科学習を通じた知の総合化はいかにして成り立つのか。そしてそれを、獲得したコンピテンシーとすることは可能かという点につき、やはり上記の意見交換を通して明らかにする。

3) 上記二点の解明によって浮上してきたコンピテンシー・ベースのカリキュラムは、児童生徒の資質能力の現状に対し、どの程度効果をあげることができたかを明らかにする。

3. 研究の方法

近年、社会学や臨床心理の分野では「エスノグラフィー」「アクションリサーチ」などと称し、研究者が継続的に現場に入り込んで当事者と共に語る手法が、対象となる現場が高度に複雑化する今日において有効な方法として注目されている。本研究はこれに着想を得て、授業の事実からの帰納をはかるべく、授業研究において行われた授業につき授業者・観察者が対等の立場で相互に語り合う「ナラティブ・アプローチ」を基本的な手法とする。この方法は単発的に行われるのではなく、同じ学校の授業実践を一定期間継続的に語り合うことによって、より有効なものとなる。実践の事実を成立経緯から継続的・中長期的にナラティブとして語り合うことを通して、そこに浮上する「学び」「育ち」を汲み取り、それらをもとにコンピテンシー・ベースの学校カリキュラムへと凝縮してゆく。この取り組みを小学校第1学年から中学校第3学年まで広げることにより、9年間の義務教育で獲得する知識・思考力・態度を見通すことができる。

本研究はそのための研究対象校として山口大学教育学部附属光小・中学校を定め、ここで行われる授業研究に継続的かつナラティブな関わり合いで研究者が関わることにより、そこに浮上する思考力や資質能力を基にしてコンピテンシー・ベースのカリキュラムを開発しようとするものである。

4. 研究成果

(1) 小中一貫教育に関する県内外の動向

主に平成29年度において、小中一貫教育に関する県内外の動向調査を行った。県内に関しては山陽小野田市立厚狭小中学校、防府市立富海小中学校、萩市立福栄小中学校、及び自治体単位のものとして田布施町、県外に関しては平成30年1月に京都で行われた小中一貫教育全国サミット、同2月に行われた国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会への参加を通して動向を探った。その結果、以下の二つのことが明らかになった。

第一は、いずれの事例もその所在地・地域の実情を踏まえて最も必要かつ可能な在り方が、カリキュラムレベルから実務レベルにわたり多種多様に試みられており、このため、小中一貫教育

のカリキュラムにはまず地域の教育課題や学校運営上のニーズを適確にとらえることが何より求められることである。第二は、その中において教科の学習指導、とりわけ各教科で求められる資質能力の育成という領域に関しては、どの事例においてもそれ自体を中心に据えるというよりも学校運営の一要素的な位置付けであり、教科指導の固有性や教科間にまたがる指導の系統性などに関してはおしなべて確立途上であったことである。

(2) ナラティブ・アプローチの有効性

本研究では、カリキュラムを設計したりそれに基づく各授業実践を構想する際に、何らかの教授学的仮説を立て、実践を通して検証するという方法をとらず、研究対象校としての附属光小中学校教員の行う授業づくりの課題や改善の試みに関し、日々の研究授業の設計や協議に加わることを通して、そこに見られる課題意識や設計上の難点と考えられていることを引き出すナラティブ・アプローチを試みた。こうした方法を基本として掲げた背景には、上記(1)で述べた小中一貫教育実践の動向がある。カリキュラム的視点や授業実践への構想を導き出すのはまず第一義に地域・学校の教育課題であり、それを背景に日々の授業改善に取り組んでいる教師集団の意識に他ならない。このことを念頭に、我々は学習の系統性に関する問題、習得するスキルに関わる問題、資質能力面からみた教科の本質に関わる問題、小中の段階差に関する問題などに対し、教科等の各領域ごとに取り組み、その結果、地域の附属学校として最も基底となる各教科の授業実践からのカリキュラム構成に資する知見を、まだ一部の教科の領域限定ではあるが一定程度得ることができた。さらに、研究分担者間でこうした成果を年度末に情報交換し合う中で、教科横断的な資質能力の存在が特に意識されるようになり、教科・領域固有のものと同様に教科・領域を超えた普遍的なものとのカリキュラム的整合性を図ることの必要性が明らかになった。

今日、教育養成大学・学部と附属学校の関係は、理論と実践という単純な関係ではない。もはや理論が先行して仮説を立論し、実践で検証するという方法論に立って、今日求められるような地域・学校に根差した小中一貫カリキュラムを構築することはかなわない。本研究は今日の状況の中で教育実践研究を進めるための方法論的スキームを開発し得たと考えられる。

(3) 教師集団と共につくる学習プログラム

教科指導に着目して小中一貫カリキュラムを開発する場合、とりわけ重要な位置を占めるのが生活科・総合的学習の領域である。当領域は公式に設置されて約30年になるが、その性格上、当初から各教科間の横断的な学びに直結する性格を有し、ここでのカリキュラム設計が各教科の学びに大きく影響することが予測された。このような中で附属光小中学校では全校的に、学びを推進させる契機としての「問い」の連続的発展に着目した実践研究が試行されていたことから、この視点から当校の教員や地域公立校の研究協力教員との協議を重ねながら、子どもの実感を重視した生活科・総合的学習への授業や単元のデザインを考える研修を進めた。

その結果、日本授業UD学会が提案する主に国語や算数等を中心とした授業づくりの3要件を、総合的な学習の時間として「単元を貫く問いの共有」「課題解決に有効な視点や方法の具体化・焦点化・視覚化・共有化」「導き出した考えの共有化・視覚化」の3要件へと発展させ、それらを保障しながら単元や授業をデザインすることで、子どもは探究的な学習を推し進める際に必要な概念や手続き等を獲得し、単元の学びを人生や社会に生かそうとする深い学びにつながる効果があることが示唆された。さらに協議の中では、そのための具体的な指導方略としては、子どもの視点に立って対象の特徴をとらえたり、特徴を生かそうと試行錯誤しながら遊びを創り出したりする教材研究、気付きの質を高める発問や声掛けの効果を実感する手法の有効性等が確認された。

(4) 教科の基礎概念の抽出とカリキュラム化への手順

教科学習に関する小中一貫カリキュラムの構築は、各教科によって小学校と中学校の教科構造が異なることもあり、教科ごとに様々な接近があり得る。しかしながら伸張させる資質能力という点に着目すれば、日常の経験的な生活世界をもとに、新たな発見や経験拡張をはかる小学校の学びと、特定分野に関する概念や技能を積み重ねてゆく中学校の学びを、いかに統合的に連続させてゆくかという点に関しては、どの教科・領域にも通ずる問題関心といえる。我々は分担者ごとに各教科・領域を定め、附属光小中学校の各教科担当教員を行う授業研究での協議を通して、この資質能力面の連続性を探ろうとした。

その結果、各教科において小中の通貫的な「柱」となる視点と、その視点に関する小中の各学年段階における指導上重点を、帰納的に導き出すことができた。一例として社会科の場合に関して述べると、以下のような経過である。

光小中学校の社会科授業では従前から、アクティブな活動として「二項対立的な話し合い」を進めてきたが、この形態を活かすべく、小学校中学年、小学校高学年から中学校第1学年、中学校第2～3学年、の3つの段階における「二項対立的な話し合い」で交わされる発言内容を、教科の目標、学習指導要領の内容配列の系統に照らし合わせた結果、日常性、利害性、構構性、の3つの視点が小中を通貫する「柱」としてはたらいっていることが明らかになった。そして、この3視点に関する資質能力を発展させるための、上記3つの段階における指導上の重点を設

定し、この設定をもとに教科のカリキュラム構成の構想に取りかかった。このような授業実践からの帰納で指導の重点を明らかにする手法は現在なお継続中であり、研究授業ごとに協議を経て蓄積されてゆく。

(5) 教科横断的視点浮上の可能性

新教育課程の実施前から、学校教員におけるカリキュラム・マネジメント能力向上が必要性が唱えられ、その一貫として教科横断的な学びの構築が推奨されてきた。しかしながらこうした横断的な学びへの切り口は学校の環境によってきわめて多種多様であり、一般的な理論仮説から出発するのには最もなじまない。むしろ本研究がとってきたナラティブ・アプローチこそ親和性が高く、学校の地域的環境、子どもの実態、それらに直面する教師集団の課題意識とナラティブを通して向き合うことによって様々な横断的学びの可能性が開かれると考えられる。そして実際、その可能性が現れ、一貫カリキュラム開発への重要な契機を得ることができた。

一例として国語科における協議においては、中学校国語科において定番とされる文学教材の系統性を議論する過程で、「見る」力の系統的な育成と、国語科に固有の「読む」力との関連、「見る」こととそれを言語化する力との関連が検討された。「見る」力は国語科のみでなく、理科や社会科での観察・調査、図工美術科での鑑賞、保健体育・家庭科での診断・検分など、広範な教科・領域で関わる汎用的な力であるが、これと「読む」との関連、言語化との関係で検討することは国語科固有の能力育成へのカリキュラム構想に深く関わってくる。同様な事例は、技術科におけるICT活用の技能、「ものづくり」をめぐるカリキュラム・マネジメント、知的財産学習の領域にもみられた。このようにカリキュラム的観点から教科指導の重点を検討する場合、汎用的な能力と教科固有の能力の関係を系統立てることが必要になってくることを協議者間で気付けたことは、教科横断的な学習の意義を考える上での大きな成果となった。

< 註 >

- 1) 安彦忠彦『「コンピテンシー・ベースを超える授業づくり」』図書文化社、2014。石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準、2015
- 2) 高橋興『小中一貫教育の新たな展開』ぎょうせい、2014。西川信廣、牛瀧文宏『学校と教師を変える小中一貫教育—教育政策と授業論の観点から』ナカニシヤ出版、2015、など

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計38件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 29件）

1. 著者名 吉川幸男・才宮大明・岩本正信	4. 巻 69
2. 論文標題 「行為と構造」から探る社会科授業展開の方略	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 吉川幸男	4. 巻 70
2. 論文標題 社会科授業における「問いの深化」－2つの授業事例から探る－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 吉川幸男, 青木達也, 西村祐一郎	4. 巻 51
2. 論文標題 教育実践研究への「周辺参加」的接近～教職大学院「学校実習」から社会科教育研究へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岸本憲一良	4. 巻 583
2. 論文標題 『ひと』を意識した説明的文章の指導－『批判読み』から『提案読み』へ－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 44-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 70
2. 論文標題 小中高の定番文学教材の系統性に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 70
2. 論文標題 「見る」を含む学習の系統性(3) 竹取物語「天の羽衣」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 66巻5/6月
2. 論文標題 言語化能力と連動する「見る」力の系統的な育成 君は『最後の晚餐』を知っているか(中二)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 解釈	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂東 智子, 住江めぐみ, 田中 章憲, 吉田 充寿, 作花 麗美	4. 巻 69
2. 論文標題 ナラティブ・アプローチによる小中一貫国語科カリキュラム開発研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 69
2. 論文標題 「見る」を含む学習の系統性(2) -写真や絵画を見るときには-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 13
2. 論文標題 主体的・対話的で深い学び」を保障する総合的な学習の時間のあり方 - 地域への愛着を深めるカリキュラムにおいて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活科・総合の実践ブックレット	6. 最初と最後の頁 88-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓・土井裕美・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平・岡崎智利	4. 巻 48
2. 論文標題 資質・能力の育成を図る生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 48
2. 論文標題 「深い学び」に導く総合的な学習の時間の授業づくりについての研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 179-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓・大塚進真・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平・岡崎智利	4. 巻 50
2. 論文標題 資質・能力の育成を図る生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 19
2. 論文標題 総合的な学習の時間を担う教師に求められる資質・能力の育成に関する研究 - 教職志望学生・若手教師を対象とした研修プログラムの実践から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学大学院東アジア研究科 『東アジア研究』	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川幸男・才宮大明・関本努・岩本正信	4. 巻 68
2. 論文標題 社会科「学習指導」の地平～「授業実践研究」の視座から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 135-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉川幸男・才宮大明・関本努・岩本正信	4. 巻 47
2. 論文標題 授業実践から探る小中一貫社会科カリキュラム～山口大学教育学部附属光学園の場合～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 181-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡村吉永・阿濱茂樹・平田直樹・伊藤文雄	4. 巻 60-3
2. 論文標題 木材加工におけるけがき作業の改善	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本産業技術教育学会誌	6. 最初と最後の頁 143-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森岡弘・阿濱茂樹・岡村吉永・澤本章・平田直樹・原田正憲	4. 巻 46
2. 論文標題 ものづくり教育におけるカリキュラムマネジメントに関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊達寛幸・田中良研・中田充・阿濱茂樹	4. 巻 68
2. 論文標題 学校教育におけるICT活用支援の実践と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 191-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿濱志保里・阿濱茂樹	4. 巻 15(1)
2. 論文標題 形成的評価を用いた知的財産学習における教育実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 産学連携学	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 68
2. 論文標題 小・中一貫を視野に入れた文学的文章の指導(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 46
2. 論文標題 教育原理と実践をつなぐ初等科生活のあり方～小学校第2学年の「栽培活動」において～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 147-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐田尾和史・藤上真弓	4. 巻 46
2. 論文標題 未知の課題にも果敢に立ち向かう子どもを育む算数科の授業デザインについての研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 229-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 47
2. 論文標題 理論を実践につなぐ初等科生活のあり方～気付きの質を高める生活科の授業～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉川幸男	4. 巻 67
2. 論文標題 社会科学習過程における「二項対立的場面設定」の思考深化機能	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉川幸男・才宮大明・関本努・岩本正信	4. 巻 45
2. 論文標題 授業実践から探る社会科で育てる資質能力	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本憲一良	4. 巻 30
2. 論文標題 『探究読み』の入り口としての比べ読み	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国語教育探究	6. 最初と最後の頁 26-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本憲一良	4. 巻 27
2. 論文標題 国語科の本質を追い求めてこそ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山口国語教育研究	6. 最初と最後の頁 7-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本憲一良	4. 巻 27
2. 論文標題 『共創的対話』をこそ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山口国語教育研究	6. 最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本憲一良・坂東智子	4. 巻 67
2. 論文標題 小・中一貫を視野に入れた説明的文章の指導	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子・岸本憲一良	4. 巻 67
2. 論文標題 小・中一貫を視野に入れた文学的文章の指導	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 87-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 45
2. 論文標題 伝統的言語文化の授業作り(1) 傍注テキストの作成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 44
2. 論文標題 『総合学習開発演習』による総合的な学習の時間へのとらえの変化についての研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 67
2. 論文標題 キャリアデザインカリキュラムの開発 -生活科・総合的な学習の時間・特別活動 を中心として-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 67
2. 論文標題 キャリアデザインカリキュラムの提案 ~グランドスキルを身に付けるという視点 から~	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 109-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤上真弓	4. 巻 45
2. 論文標題 授業改善に向けた校内研修のあり方	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前原隆志	4. 巻 44
2. 論文標題 小中一貫教育の動向と課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前原隆志	4. 巻 36
2. 論文標題 小中一貫教育をめざした学校評価の取組について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育大学協会研究年報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計10件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 宮崎洗佑・赤星冨・平子道生・藤永啓吾・佐伯英人
2. 発表標題 小中一貫教育に関する一考察 - 理科の授業について -
3. 学会等名 第68回日本理科教育学会中国支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂東智子
2. 発表標題 「見る」を含む学習の系統性(2) 絵画や写真を見るときには
3. 学会等名 第134回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 坂東智子
2. 発表標題 「見る」を含む学習の系統性(3) 君は最後の晚餐を知っているか
3. 学会等名 第135回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤上真弓
2. 発表標題 キャリアデザインカリキュラムの提案～『基礎的・汎用的能力』の土台を育むために～
3. 学会等名 日本生活科・総合的な学習教育学会第27回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鷹岡亮・横山誠・大塚祐亮・藤上真弓・長友義彦・霜川正幸
2. 発表標題 山口大学教育学部ちゃぶ台方式研修への参加者の意識調査
3. 学会等名 平成30年日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鷹岡亮・横山誠・大塚祐亮・藤上真弓・長友義彦・霜川正幸
2. 発表標題 小学校における遠隔合同授業で身に付ける力と態度の整理について
3. 学会等名 教育システム情報学会第43回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 坂東智子
2. 発表標題 「見る」を含む学習の系統性 小中国語科教科書（光村）を中心に
3. 学会等名 第133回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤上真弓
2. 発表標題 キャリア教育を充実させるためのワークシートや表現物の工夫～総合的な学習の時間の学びの中で～
3. 学会等名 日本生活科・総合的な学習教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤上真弓
2. 発表標題 学生と若手教員の満足度評価から見たピア・サポートのあり方について -協働型研修『ちゃぶ台次世代コーホート』のプログラムの改善に向けて-
3. 学会等名 平成29年度日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 前原隆志
2. 発表標題 小中一貫教育をめざした学校評価の取組について
3. 学会等名 日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岸本憲一良・中野登志美監修、花岡一平・住江めぐみ編著 中国・国語教育探究の会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 小学校「提案読み」「批評読み」の課題・発問モデル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	阿濱 茂樹 (AHAMA Shigeki) (00361973)	山口大学・教育学部・准教授 (15501)	
研究分担者	佐伯 英人 (SAIKI Hideto) (30457296)	山口大学・教育学部・教授 (15501)	
研究分担者	藤上 真弓 (FUJIKAMI Mayumi) (40737566)	山口大学・教育学部・准教授 (15501)	
研究分担者	吉田 貴富 (YOSHIDA Takatomi) (50274147)	山口大学・教育学部・教授 (15501)	
研究分担者	坂東 智子 (BANDO Tomoko) (60634764)	山口大学・教育学部・准教授 (15501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岸本 憲一良 (KISHIMOTO Kenichi rou) (90437616)	山口大学・教育学部・教授 (15501)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	前原 隆志 (MAEHARA Takashi) (50776086)	山口大学・教育学部・教授（特任） (15501)	
連携研究者	松岡 敬興 (MATSUOKA Yoshiki) (10510539)	山口大学・教育学部・准教授 (15501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関